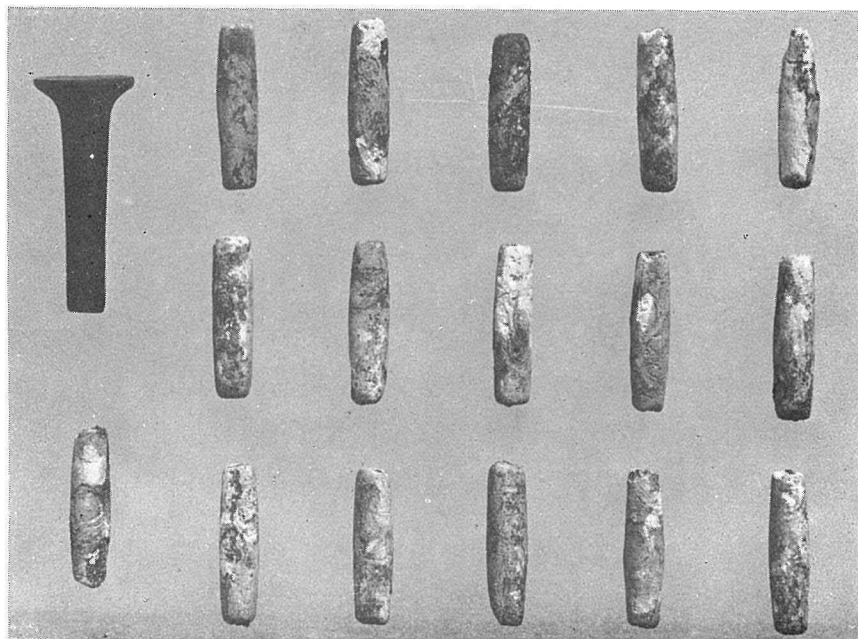
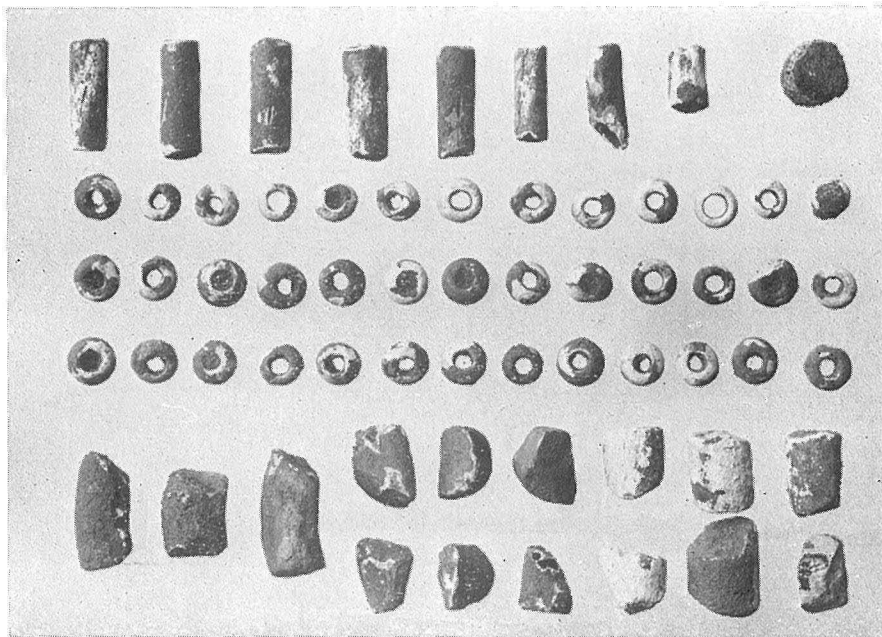


(1) 筑前臼佐原出土勾玉鎔范（左）及須玖出土玻璃勾玉（右）（実大）



(2) 筑前須玖甕棺墓出土玻璃管玉及塞杆（左上）（実大）



(1) 筑前前原町甕棺出土玻璃釧片・管玉・小玉類



(2) 玻璃渦文小鏡 故守屋孝藏氏蒐集品 (36)

# 日本上古の玻璃

梅原末治

【要約】 西方に由来する玻璃の知識が東亜に流伝したのは早く戦国時代に遡るのであり、それがやがて日本にも波及したことが今世紀の二十年代に入つてからの考古学上の發見例から推されてきた。この日本での古い玻璃の遺品は、西日本の筑前地方から發見されたもので、中国より伝えられた璧と共に、内地で作られたと覺しい勾玉のあることが伝えられた。ところが近年になつて筑前須玖付近から新たに玻璃で作つた勾玉管玉などに加えて、勾玉の鎔范が見出され、また一個の玻璃の塞杆などの發見もあつて、日本上古の玻璃に就いての一層具体的な事實を示すことになつた。この一文はその機会に既往の關係遺品にも再検討を加え、当初中国から伝えられた玻璃そのものと、その技術に依つてこの國で作られた玻璃の實際に就いて記述し、然る後出土遺品との連関に於いてその時代を論じ、その上に表われた上古初期の文化の様相に及んだものである。そしてなお孤例であるが故守屋孝藏氏蒐集品中の一面の珍しい玻璃の小鏡が、我が上古に同じ西日本で作られたものであることをも論述した。

## 一

日本の古い高塚の副葬品にガラスで作つたもののあることが知られたしたのは、江戸時代も早い元禄（一六八八—一七〇三）の頃であつた。河内古市の安閑天皇陵発見の所謂玉椀——カット・ガラス椀——がその最初のものである。

この器は当時から一部好事家の注意に上つて、爾後、同地の古刹西琳寺の什宝として保存され、それに就いての著録をも見たことであつた。明治になつて、その五年（一八七二）に和泉にある仁徳天皇陵の前方丘の一部が崩壊して、竪穴式石室が露われ、うちにまた同じような玻璃の容器の遺存したことが伝えられた。かくて是等の品が、奈良正倉

院伝来の数多い玻璃の容器類と並んで、もと西方に由来する玻璃が古くこの島國に伝えられたことを物語る物的資料として、早く上代に於ける東西文化の交流の上での新たな興味を呼んだのである。

我が古代の玻璃品に就いては、その後日本で考古の学が発達するにつれ、今世紀に入ると各地の古墳より玻璃で作られた小玉類に加えるに、特色ある形の勾玉に同じ材質のものまでが段々と見出されるようになり、更に北九州に於ける須玖其他の所謂弥生式の甕棺墓から、古墳より時代の遡る玻璃製品——うちに璧の破片を含む——の出土なども確かめられるに至つた。<sup>①</sup>そして別に近接した南鮮慶州での古新羅の陵墓に於ける玻璃器の<sup>②</sup>新発見なり、従来殆んど実例を欠如していた中国本土でも古い漢及び戦国時代の玻璃製品の出土例が知られた。これ等の事実によつて、西方に由来のある玻璃の知識と技術が、欧亜大陸北部や葱嶺を越えて中国に伝わり、更に東方へと流伝したことがいよいよ迹づけられ、その東方へと流伝した様相の一端を示すのが、我が国上代の遺品であることが推されるに至つた。

私は一九二四年の五月に朝鮮の慶州で金鈴塚の発掘調査

に従事した際、玻璃碗二個をこの手で掘り出したことから、爾後中国に於ける古い玻璃品に特に留意することとなつた。<sup>③</sup>従つて我が筑前須玖の遺跡で中国のものと同認められる玻璃壁片の出土を聞知るに及んでそれへの興味を強めた。終戦後、山崎一雄教授が新たに化学上の分野よりする古代玻璃の研究を行うに當つて、考古学上確實な遺品の提供を求められて来た。そこで古代玻璃の研究を続けられている原田淑人博士の驥尾に付し、改めて関係資料を求め、日本上古の玻璃の考察に關与した。雑誌『ミニージャム』の第六八号に載せた「日本古代のガラス」は初に挙げた河内安閑天皇陵出土の所謂玉碗が再発現した機会に、それまでの所見の概要を録したものに外ならない。文中その原初の様相に關しては、所謂北九州の甕棺墓の出土品より觀て、中国の古文化がその地に波及した際、鏡・利器などと同様玻璃の遺品も技術と共に伝えられ、やがて小玉ばかりでなく玻璃の勾玉なども早く同地で作られたのが認められることを記した。

ところでこのような北九州に於ける日本での古い玻璃製品の实物が、其後の三、四年の間に福岡地方の篤志家達の

古代遺物検出への異常な熱意によつて更に重要なものがあり、一層具体的にその事実が確められることになつた。筑紫郡春日町小倉在住の鈴木基親氏が須玖の甕棺墓群から見出した勾玉・管玉・所謂塞杆の類と、曰佐原ササハラの甕棺埋葬地帯で拾得した勾玉の鎔范の如きは、中での最も注目すべきものである。氏は私の古代玻璃への関心を知り、是等の遺品を挙げて、研究の資に供せられた。さればこれを機会に、改めて既往の關係の遺品にも記述を及ぼし、それ等から知られる我が国に於ける初期の玻璃の全般に就いて論述することにした。

## 二

さて日本で最も古い玻璃の遺物が見出されるのは、既に触れたように北九州の所謂弥生式文化期の遺跡であつて、その従来知られたものでは須玖岡本の支石を伴うた甕棺墓が著しい。同遺跡は、ただに玻璃ばかりでなく、周知のようにな種々の点でその時期の文化を推す重要な所なのである。従つて出土の玻璃も既に紹介されているが、改めてそれから記述をはじめることにする。

元來須玖岡本の大石下の甕棺墓は明治三十二年（一八九九）に偶然掘開されたのであるが、当時発見の多数遺物の調べなどは一切行われなかつた。出土品中の玻璃の如きも多数の鏡片と共に後になつてようやく遺存の事実が確かめられるに至つたものである。即ち璧の破片は二、三年後に同遺跡を訪れた八木装三郎氏が現地より齎し帰つたものと覺しく、大正になつてそれが認められたもの、また他のガラスの勾玉の如きは、更におくれた大正十一年に故中山平次郎博士が遺跡地で検出されたものである。

二者のうち璧片の实物は大正十二年九月の関東大震災で失われてしまつたが、それは六センチ内外のほぼ似た大きな破片二個であつて、共に面は風化白色を呈し、その粗な地肌の面に切目状の穀粒様文がおぼろげに認められるものであつた。この一見あまり目立たない破片が大正七、八年にそれと認められたのは、須玖遺跡への関心が高まつたに加えて、当時中国から新たに将来された玻璃璧と似ていた為であること、後藤守一氏の『考古学雑誌』<sup>①</sup>の記載の如くである。同じ璧片と思われるものは極めて細片ではあるが、最近九州大学文学部の渡辺正氣氏の手で、故中山博士が須

玖遺跡で蒐集しておかれた多数の鏡片の中から新たに検出された。この方は形を認めるにはあまりに小さ過ぎるが、薄い作りの扁平な淡青色を呈したもので、山崎一雄教授に従うと鉛ガラスであつて、成分は中国での数多い玻璃璧とほぼ同じものであるという。ところで右の須玖の璧と並んで、実物は伝わっていないが、北九州で同種の遺跡として有名な糸島郡三雲の甕棺墓にも同様な璧の存したことが青柳種信の記述に見えている。

江戸時代の終りに近い文政五年（一八二二）の二月に清四郎なる農夫が土堀を築こうとして地を掘り、見出したその甕棺墓に就いての種信の記述は『筑前国怡土郡三雲村古器図説』と題するもので、問題の遺物については

鏡を重ねたる間毎に形扁く円にして径二寸八分、中間に穴あり、穴の径七分両面を<sup>シラシラ</sup>塗土にて塗れる如き物を挿めり、半面の白き中に<sup>シラシラ</sup>飯紋あり、此すべての形厚式分許其縁を<sup>シラシラ</sup>側て見れば<sup>シラシラ</sup>壘土の如き物の中心は<sup>シラシラ</sup>銚色にして<sup>シラシラ</sup>沢あり<sup>シラシラ</sup>硝子の如し、それは<sup>シラシラ</sup>硝子の久しく<sup>シラシラ</sup>水土に<sup>シラシラ</sup>蒸れて表は白色に<sup>シラシラ</sup>変じたるか、これも悉く<sup>シラシラ</sup>碎けて全からず。

と詳しく記し、その破片の一つと全形の図をも載せてある。

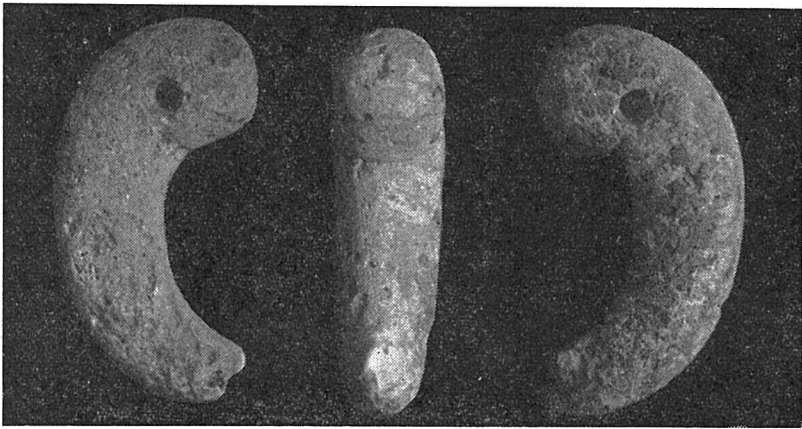
破片の方は中国の古玉に見る穀粒文璜の形に描かれてあるが、記述なり完形品の図からすると形は小さいものながら璧に相違なく、その風化した一面に穀粒文が表わされていると書かれているのは、中国出土の玻璃璧に穀粒文が一面にあるものの少なくないこと、例えば故ウインスロップ蒐集品 (G. Winthrop Collection, Fogg Art Museum Harvard University) や、大阪江口次郎氏所蔵の遺品に見るのと同様に思われる。それで同時出土の多数の鏡が中国鏡であるのと併せて、硝子とあるその璧もまた彼土よりの舶載たることが認められることである。

### 三

次に勾玉の方は故中山博士が大正十一年に須玖岡本の大石下遺跡の局部で拾得されたもので、この玉は博士の記述からすると、後年のことながら、その前後に蒐集の夥しい鏡片と共に、本来の副葬品だつたこと殆んど疑問を残さない<sup>⑥</sup>。現在九州大学文学部考古学教室に所蔵されているその勾玉は、尾部は少しく欠けてはいるが、長さ五・四センチの割合に大きい頭部に切目のある所謂丁字頭のもので、

全面は既に風化し去つて粗な白堊色を呈するが、尾端の欠けたところの深部には鮮緑色の本来の色沢をとどめ、よく玻璃たることを示している。玉の形は体が完好な丸形で、それののびて曲つた尾に対し、頭部は均衡のとれた大きさで、孔が中央に程よく開いた勾玉として最も整うた形のものである（第一図）。この形は後に挙げる新出土の勾玉とも同様であつて、近年発見例を加えた肥前東松浦郡地方の甕棺内で細形銅劍等と伴出する硬玉の勾玉が概ね古拙な形をしているのとは違ふ。

須玖遺跡出土の玻璃の勾玉に関連してここでまた糸島郡三雲遺跡でも、それと想定される勾玉のあつたことが同じ青柳種信の記述に見える。『筑前国怡土郡三雲村古器図説』のこれに関する記載は、古鏡三十五面、銅銚大小二



第一図 筑前須玖発見玻璃勾玉（故中山博士蒐集品）

口などの発見品を挙げたくだりに  
勾玉一管玉一つあり、玉はいづれ  
も練物にして質は鈍なり、其数多  
かりしかども悉く碎けて甕中に泥  
の如し其内に二つ全ものあり形は  
いと矮少也紛紅色なり。

とある。右の記述には練物として  
いて、前記の璧の場合のように硝  
子とは言うていないが、須玖の勾  
玉に似通つたところがあつて、ま  
た玻璃であつたと見える。然るに  
故中山博士は別に須玖遺跡より検  
出したと言ふ角製管玉なるもの  
所見から類推して、此の類をも同  
じ鹿角製であろうと解し、北九州  
での勾玉の発達を材質の上から、  
時代の遡る三雲での鹿角から須玖  
の玻璃への推移があとづけられる  
と論述せられた。<sup>⑧</sup>

須玖の大石下から博士が蒐集したと言う角製管玉の実物は、いまその所在を詳にしないが、昭和四年行われた京都

大学の須玖調査の報告書『筑前須玖史前遺跡の研究』には、その際D地点で十二個の同じ角製の管玉が出たことを記し、その一例を挙げて大石下から出たものと同じであるとしている。そして図示の一個が現に同大学文学部博物館に収蔵されてある。ところが此の角製管玉なるものは、褐色がかつた色沢の上で一見角のそれを思わしめる外観を呈するが、仔細に観察すると、体に骨髄が見えず角質とするに疑が生まれ、寧ろ玻璃の風化したものとする事の妥当なるを示すのである。そして此のことは更に近年同じ須玖の甕棺墓群からの相似た玻璃管玉の實際に依つて裏書きされるものがある。玻璃が著しく風化した場合、角に於けると同様脆くなることは今や多くの実例に認められるところである。されば記述に見える三雲の勾玉と管玉はまた玻璃であつたとすべきであらう。

須玖の遺跡と並んで著名なその三雲の甕棺墓で、上記の硝子の璧と併せて、同じ質の勾玉なり、管玉がまた副葬されてあつたと認められるこの事は、勾玉が古く大陸にその

例を見受けない点よりし、且つは両遺跡の性質より観てまさに重要視される可きである。

#### 四

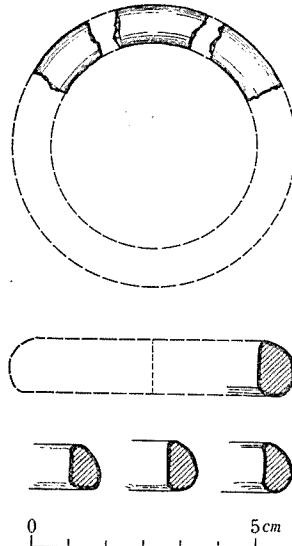
上代の玻璃での目立つた以上の遺品について、出土例の多いのは、同じ須玖の甕棺墓にも既に存在の認められた玻璃の小玉である。各地の古墳の佩玉に普遍的なこの類は、北九州でも同じ甕棺墓ばかりでなく、それと同時に並び行われた古い箱式棺でも見出されること例えば対馬に於けるが如くである。併しその他の玉をも加えた著しい玻璃の遺物としては、肥前永田の遺跡なり筑前糸島郡前原町大字東字二塚出土品が挙げられる。現在東京国立博物館の所蔵となつている後者の一類の遺品は、終戦後に原田大六氏が注意したものであるが、発見は昭和十年八月に遡るといふ。原田氏が当初(昭和二十五年二月)有光教一氏に寄せた覚書は、よくそれについての要をつくしているので、請うて次に全文を引用する。

(遺物が出た)甕棺は須玖式合せ口のもので、甕はほぼ完全な形で保存されていますが、発掘現場ではありません。(そ



れが）前方後円墳に近い（所での）発見（なの）も興味を惹きます。甕の中には相当量の朱があつたらしく、遺物は皆朱に染んでいます。遺物は

- 一、硝子製釧 二個 大小あり二十二の断片となつてある
- 二、硝子製管玉 八個 大形に属するもの
- 三、硝子製小玉 三十八個 案外に大形である



第二図 土出町原前築 釧の形状  
土出町原前築 釧の形状

の三者で、（その）釧は大和唐古発見の黒漆塗木釧に似た円形のものらしく、断面は歪んだ半円をしています。管玉は孔が真すぐにあいてあつて製作の方法を覗えるものがあります。それぞれにあまり大小の違いがありません。小玉は管玉と均衡のとれたもので、形はいろいろと違い、孔にも大小があります。是等の遺物を一寸見ると硝子と思えない程に変質して

いて、それは中山博士発見（須玖）の勾玉と趣を同じくしています。十五年も以前の発見品ですが、水洗もされず（いまも）朱の付着したままでありますので、最近発掘した品物のように見受けられます。

図版第二の1に載せた写真は、其後間もなく高橋猪之介氏の撮影した実大に近い写真で、そのうち上段の大部分が管玉、また右端の一個と中段三列が大小のある小玉類で、それは四十個を数える。下段が覚書に大小二個分という釧二十二片中の十五片である。現在東京国立博物館では、管玉と小玉とを然るべく一連につないで、玉釧として取扱うていて、その数は管玉九、小玉三十九個である。但しこれもと玉釧であつたとする確証はない。朱に染んで面の風化した中で、管玉の工合は、小玉類と共に原田氏が挙げているように白堊色を呈して、角の風化の場合とよく似た外觀のものたること上記須玖の所謂角製管玉なり、次に録する。同じ須玖での新出土の管玉に等しい。

玻璃釧の破片もまた博物館で一連としてある。個々の破片の示す大きさの上で、原田氏のいう二個分とするにふさわしいものがある。但し破断が著しくその上既に失われた

ものもあるようなので、それぞれの復原は不可能である。割合によく原形をのこした、やや大きな三、四の片を取つて体の曲率を測ると、いずれも外径が八センチ内外あつたと見られて、それはほぼ古式古墳出土の石釧の示す数値に近い。

またそれぞれの断面は外側の張つた下膨れの楕円形をして、環体は太く、これも素文ではあるが石釧の断面に似通つてゐる。第二図はその断面と推定復原形である。現存の破片の上では、うちに朱に染みながら、比較的水色のガラスのものと地肌をのこしたものと、面の著しく風化して白堊色を呈すること、同時に出土管玉・小玉の類と同様な二つに分れるだけで、個々の断面には少許の違いはあるが体の曲率などの上で原田氏のいうような大小の別を見出し難い。

此のガラスの釧片に就いては山崎一雄教授の化学上の検査に依つて、多くの古式ガラスと同じ鉛ガラスであつて、その色沢は酸化銅で色づけられているのが確かめられた。ところが同時の調べで、付着の赤色が水銀朱であることの外に、風化して白堊状を呈した表面が燐酸鉛となつてゐる事実が認められたという。普通に鉛ガラスが風化すると炭酸鉛となるのに対して、これは異常である。此の種の現象は、

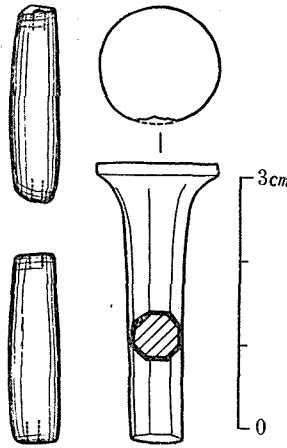
山崎教授に従うと次に述べる須玖新出土の勾玉・管玉の場合に於ても同じように認められたとの事である。そうすると此の種玻璃玉には骨角製と見られ易い一面があるわけになる。

## 五

さて近年新たに検出された同じ地方での玻璃の著しい遺品は、初にも触れた須玖岡本の甕棺墓地帯で鈴木基親氏が丹念に蒐集したもので、それ等はやはり勾玉一個と多数の管玉を主とするが、別に中国での葬玉中の所謂玉杆に当る玻璃製品が一個あり、更にやや離れた日佐原出土に勾玉の鎔箔のあることが特に注目せられる。その須玖での遺品はすべて同地に群集する甕棺墓のうちから見出されたものである。同氏に依つて中での管玉からその状況を挙げることにする。

管玉の出た甕棺は、往年京都大学の発掘した地点からは東南方の、小川に沿うた台地上に埋葬されてあつたもので、此の地域には箱式棺一、土壙二をまじえた数十の甕棺墓——甕棺は京都大学調査の際出土したと同形式のものである

——が見出されたが、その一つの合せ甕の下甕の下底に遺存したのを、昭和二十九年に氏自から拾得したという。この玉は、もとはほぼ相似たもの三十個あつて、一連の首飾玉をなしたらうことを思わしめたが、其後若干を中原志外顕氏と三筑中学に分与して、図版第一の2に載せたのは、中の十六個である。是等の管玉は実大のその写真で見ると、中

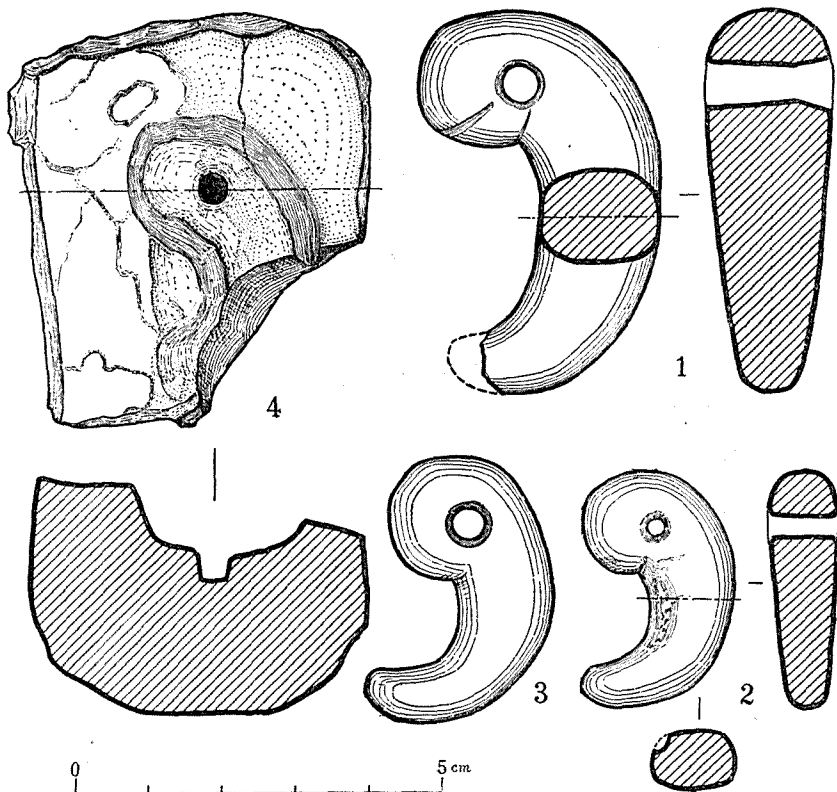


第三圖 須玖出土玻璃管玉及  
塞杆(金閣君)

径六ミリ前後、長さ二センチあまりのほぼ同じ大きさをしている、やや胴膨の見える管形であり、その孔は割に太く中央に貫通している。現在すべての表面が全く風化し去つて白堊色を呈し、面が極めて鈍となつてゐること前原町のそれらよりも甚だしい（第三圖の左）。併し破断した一つでは中央の深部に鮮かな青緑の玻璃本来の色沢が見られる。

鈴木氏の採集ではないが、須玖の同じ地区のやや北に寄つた土壙でも玻璃の管玉が遺存した。玉は金子正雄氏の蒐集で、もと六、七個一所にあつたという。いま三筑中学の藤田教諭の所有する中での一箇は、同じ図版の左の下に載せたもので、上下の端はやや磨滅しているが、現長二・二センチのまた胴膨れの趣のある管状をして、これは面の風化がなく、不透明ながら、青水色の玻璃本来の色沢をとどめている。九州大学の渡辺正気君の話では他の玉もみな同様とのことである。

次に勾玉であるが、その一個は同じ地区で南縁に近いところにあつた甕棺の一つが、同じ二十九年頃土取り作業で破壊された際の出土で、鈴木氏が発見者から譲り受けたものという。玉は既に挙げた故中山博士採集のそれと殆んど同じ外観のもので（第四圖の2）、長さ三・四センチの小形ではあり、また頭に切り目などないが、丸い体の曲りが頭尾と程よい均衡を保つた一層整美な形をして、頭孔は直に貫通して両縁が心持ち大きく、孔壁は滑らかで使用の形迹をとどめており、その奥の辺にわずかながら水色の玻璃本来の色が認められる。ちなみに樋口隆康氏に従うと、玻璃



第四図 須玖出土玻璃勾玉(1, 2)；臼佐原発見勾玉鉛箔(4)及玉復原図(3) (金関君)

の勾玉一個をもと故加藤新吉氏が所蔵して、それがまた須玖出土というのを朝倉郡三奈木小学校の郷土室で実見したが、その所見では上記の玉とよく似たものであつたと。併せ付記しておく。

さて是等の管玉なり勾玉の外観は土壙出土の例を除いて、すべて白亜色を呈すること上記前原町出土品の場合と同様である。そして山崎教授の行うたその化学検査で、質も鉛ガラスである。それ等がまた前原町の鈷片と同じく、風化した表面の結晶質の磷酸鉛であることもX線の処理で明らかにされた。この特殊な共通した現象の生じた理由として顧みられるのは、それ等のすべてが、もと内部の空洞な甕棺内に葬置の遺骸と共存した点である。甕棺では多くの場合、骨は歳月の経過と共に概ね消失し去つて、時に副えた遺物のみを残すに過ぎないこと、例え

ば上記の一甕棺の下甕に於ける管玉のみの残存の如きである。此の場合、密閉された棺内で骨格が消失する過程に於いて、その燐酸カルシウムが共存の他の物質に作用するところが自から考えられる。然らば玻璃の玉類の風化した表面の燐酸鉛である事實は、その現象と解すべきであろう。甕棺とは違う土城からの管玉がそうでなく、山崎教授の検査の結果に従うと、中国で遺骸の口にくましました哈蟬の或ものにも同じ現象を見る事實は、その遺骸と密接に結びつくことを裏書きするものである。元来如上の遺物類は、學術調査の出土品ではないが、甕棺内に存したことは、この点からも確かめ得るわけであり、また玉類が角と見誤られる外観のよつて来るところも首肯し得られるわけである。

以上挙げた玉類出土の遺跡は、なお福岡近郊の須玖と三雲・前原から管玉の類は肥前の永田に限られてゐるが、是等の甕棺から段段と発見例の加わつた勾玉と管玉などが一層その例の多い玻璃小玉と共に、初の璧とは違い本邦上古の遺物として普遍的な、而も勾玉の如きは日本上古特有のものたる点で、玻璃のそれ等の玉がこの地方で作られたることが自から推されるのである。このことは、既に早く

故中山博士が須玖で最初の勾玉を見出した際、推論されたのであつたが、その後著しく拡充を示した極東地域での考古学上の関係知見よりしても、古代中国では玻璃が戦国時代に既に一般に行われて玉類や葬玉・劍飾具などにその遺例を加えて来たにもかかわらず、勾玉の如き玉がなく、朝鮮半島にあつても、此の種玉の分布は古く日本の勢力の及んだ時期の半島南半に限られていることなどより、玻璃の勾玉が、その知識の波及に依つて作られたもの、換言するとこの国での言わば確かな古い玻璃の製作例とすべきことに蓋然性を与えるのである。そしてこの点を具体的に示す物的の証拠が新たに鈴木氏の手で見出された。須玖に近い同じ春日町曰佐原での勾玉の鎔范がそれである。

## 六

須玖遺跡から鉄道を越えて西方約一杧の位置にある曰佐原ハサハラの南北にのびた台地は、一昨年福岡女学院の移転敷地となつた為に広範囲に亘る土工が行われた。その際、石蓋土城、箱式棺などを主とした——甕棺は一例のみである——多数の古墓群の存在が知られて、その或者から後漢時代の

初期と認められる長宜子孫内行花紋鏡なり、勾玉・管玉・切子玉など、いろいろな玉類が見出された。ところが同地区より二、三百米離れた地点で、その後別に弥生式後半の土器——うちに完形の長手の壺を含む——の埋没していたことが認められ、同所で鈴木氏が勾玉の鎔范を拾得したのである。

この鎔范は赭色を帯びた石英質の細砂を固めて作つた、もとの竪五・二センチ、横幅四・八センチ、高さ三・四センチの小形で、いまその一部が欠けなどし、あまり目立たない外観のものである。併し実大写真（図版第一の1）に見るように、平滑に作られたその中央の部分が凹んであつて、一部分が欠けながらも、これが明らかに勾玉の形をしており、胎土たる細砂が固く焼き締り、一部に灰緑色の物質の付着などもあるところ、実際に使用された鎔范たること疑うべくもない。凹みの示すその勾玉の形は、長さが約三・三センチを測り、腹部の外側に当る部分は欠けてわからないうが、頭部と尾の工合より推し、体が程よく曲り頭尾の均衡のよくとれた整つたものである。この円体を切半した形をした凹んだ玉形の頭部の孔に当るところが更にその大き

さだけ凹んでいる（第四図の4）。

右の鎔范の示す形からすると、それはもと二つの部分からなる合せ型の一方に当り、頭孔には別に棒状部が加わつて一具をなしたものであつた。そして一方に作られた鑄口——これは現存の部分には見当らないが、破損した下辺にあつたと想定される——から溶液を流し込んで玉を作つたこと同地方発見の銅戈や銅鉞などの鎔范と同じであつたに相違がない。ところで此の場合、流し込んだ物質として先ず考えられるのは銅であるが、そのような鑄銅の勾玉はなお出土例がないことから、ガラスであつたらうことが、付近の同じ遺跡に玻璃勾玉の実例が遺存するのと相俟つて自から想定されて来る。そしてその点は鎔范に見られる勾玉の形が、上に挙げた二つの玉と殆んど同じ形をしていることや、范の一部に付着残存した物質がそれに連関するものと認められることなどで確かさが裏書きされるのである。さて此の鎔范で作られた勾玉の形に就いて、金関怨君が欠けた部分を補足の上復原したものが第四図の3である。それは頭部と尾部との均衡のよく取れた勾玉としては整美な形をして、前記の須玖出土の一例と殆んど見まがうばかり

である。当初この鎔范を見た際、かの玉がこの鎔范で作られたのではないかとすら思われた程であつた（図版第一の1）。尤も鎔范の玉の方が須玖出土の実物に較べて幾分か大きい。既に玻璃の勾玉が見出されている地点に近いところで、このようなその玉と殆んど同じ形の鎔范が検出されたことは、同種の玉がこの地方で作られたことを具体的に示すものに外ならない。

## 七

次に勾玉・管玉の類と共に須玖岡本遺跡地帯から鈴木氏の得た玻璃製品に一個の塞杆がある。この玻璃品は昭和四年行つた京都大学の同遺跡発掘地区の西方に接した区域から昭和三十三年に見出された七組の甕棺のうち、その北東寄りの道路に近い地点に位置した一つに存したもので、鈴木氏に依ると、氏自から合せ甕の下甕の底から検出したと言ふ。それは上来の玻璃の玉類とは違つた表面に風化などのない、濃青色の鮮かな色調をしたもので、長さ三・三センチの細長い八角形柱状の一端が円盤状に大きく作られ、その径一・四センチを示すところ一見所謂耳瑠の形に似通

つている（図版第一の②左上、第三図の右）。併しその柱状体には穿孔などなく、八角形をした一部が塞状をなすところ、大きさと相俟つて、中国に於ける葬玉具中の塞杆たることが推される。相似た一例を挙げるならば朝鮮石叡里第九号墳遺跡出土の玉杆の如きがそれであり、同様な玉杆の中国本土での出土は今や新発掘に依つてその例を加えつつある。

器の形に対して此の玻璃の質は既に初にも指摘したようにいささかの風化もない鮮かな濃い色沢である上に、その八角体の稜線は鋭い縁線から成つて居り、この点一種のカット・ガラスであることを示す。而して玻璃そのものの化学成分は山崎一雄教授に従つて上来の勾玉や管玉などは可なり違つて居ると言ふ。然らば外形と相応じて、此の玻璃は当時中国から齎された舶載品であり、その時代また中国でのこの種の葬玉の行われた時期、少くとも漢代を下らないことが自から認められる次第である。ところが初に挙げた須玖・三雲出土の玻璃璧がその特色のある作りや形から中国の舶載品であることの一般に認められているのに対して、ここに新たに知られた同様の舶載の例が、当時中国の戦国から漢代に行われた葬玉の類を玻璃で作つたもので

ある事實は当然注目される可きであらう。

ガラスが西方から中国に流伝した際、瑠璃・玻璃・火芥珠などの名で呼ばれ、それで古玉と同じ遺品が作られたことは、例へば『漢書』西域伝に璧流璃の記載があるなど推せられるところであるが、今世紀の二十年代から知られ出した中国での古い玻璃製品が、戦国・漢代に於いて通有な丸玉を外しては璧・哈蟬・玉豚其他の葬玉具、璚・璆等の劍装具等玉器に見る類を主としているのである。<sup>④</sup> とうするに我が北九州での初期の玻璃器のうちの舶載品に、なほ哈蟬は見出されていないが、璧に加えて新たに此の塞杆が甕棺内から出土した事は、彼土の文物のこの面での伝播をも如実に示すものに外ならない。ここでそれが同じ三雲や須玖の甕棺内に多数の明確な前漢代の舶載鏡の副葬されている事実との内面的な連関がまた顧みられることである。

一個の塞杆ではあるが、此の特色ある遺品は既に失われた壁類と共に中国から此の国に伝えられたことの明な実例をなすものであり、それはまた早く漢盛時に遡る時期であったことを示すものとせられよう。

## 八

以上挙げて来た出土例よりすると、我が国上古に於ける玻璃品は、当初他の進んだ文物と同様に、中国本土で戦国から漢の世に行われ出したその遺品が、その頃に於ける文化の東方への流伝に依つて齎されたものであつた。玻璃が当代人の興味を惹いたと見え技術もまたやがて伝えられ、大陸に近い北九州の一部で作りに出したものが勾玉・管玉など前者と違つた一群の玻璃品である。後者の事實を具体的に示すものとしてその勾玉がこの国に於いて特に發達した、朝鮮半島や中国に類を見ないものであるに加へて、更に現実にその鎔范の同地域での出土がある。而も舶載品と勾玉の類が同一遺跡に於いて並び存するのである。

ところで問題とする玻璃の舶載品とこの国で作られた勾玉類の共存する須玖なり三雲の墓は、我が国に於ける所謂弥生式文化の中期の代表的な遺跡であることはここに改めて説くまでもない。そうするとその時代なり遺品の示す意味が当代文化觀と重大な關係を持つことである。三雲・須玖の遺跡の実年代に就いては、出土の古鏡の鑄造年代より

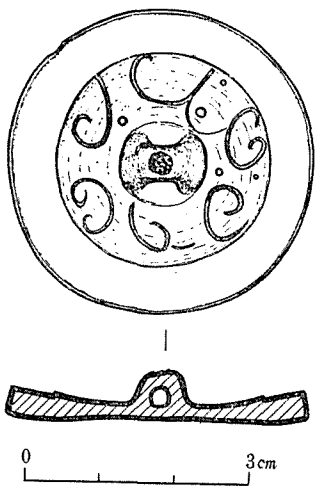


見て西暦紀前後とする見解が一般に行われて来たことであるが、須玖に存する一面の夔鳳鏡の実年代に依つて、それが止揚せらる可きであつて、此の有力者の墓の営まれた年代が、如何に古くとも西紀二世紀の後半を遡り得ず、寧ろ西紀三世紀に比定すべきであることは明らかである。従つて遺跡に存する玻璃の勾玉の時代はそれからまた推されるところがある。いまこれを勾玉自体の形に就いて見ても、それ等の三例はいづれも既に勾玉として整つた形をしたものであつて、同じ北九州でも、近年その出土例を加えた肥前各地の甕棺墓から古式の銅劍・銅鉾の類と伴出する硬玉の勾玉類の古拙な形に較べると確かに進んだ後出のものたることが顧みられることである。<sup>⑩</sup>

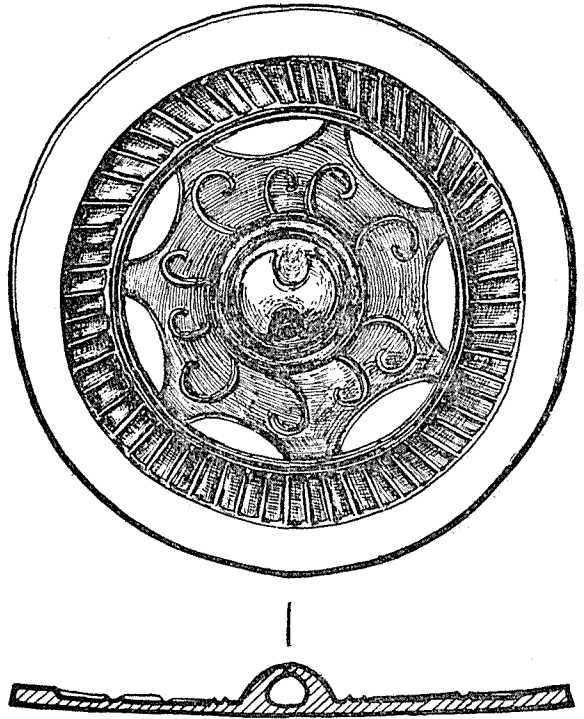
北九州の一部で玻璃の勾玉・管玉などが現実に作られ、その時代の三世紀以前に遡ることが推される如上の帰納に対し、同じ類としてここで新たに顧みられる別な玻璃品がある。故守屋孝蔵氏蒐集品中の一面の玻璃の小鏡がそれである。この鏡は一九二〇年代の後半に同氏の有となつた出自の詳らかでないものであるが、径四センチの小さいものながら面に風化があつて、よく古調を帯びた濃緑色の鉛

ガラス——山崎教授の鑑査に依る——で、鏡体は第五図に載せた実測図のように、作りは厚いが古い鏡の通性を具えている。即ち面には少許の外反りがあり、また背面には形にふさわしい円形の目立つた鈕を繞つて文様が表わされてある。従つて古い鏡たることに疑問はないが、このような例が他にない為に、その性質については単に六朝頃の珍らしいものであるうかと考えられていたに過ぎなかつた。

併し形の小さいことと面の風化の爲とで不鮮明な此の鏡の背文を改めて詳しく観ると、挿図に描いたように、やや突起した緑の線の内側に近く一突圍があつて、所謂内外二区に分たれた内区に、外方から同じ突線で五条の簡単な蕨



第五図 玻璃小鏡形状図（金関君）



第六図 豊前国犀川出土仿製鏡実大図（金関君）

手状渦文を出し、鈕の近くにまばらな珠点を配して、是等の線文のすべての古拙な表出であるのが認められる（第五図）。このような図文の描線は一般に中国の鏡には全く例のないのに対し、本邦古代での仿製鏡には、常に見られる共通したものである。するとこの珍らしい玻璃の小鏡もその一例であろうことが新たに考えられて来る。此の場合更にその

には適する材質でない上に、この小形で作りの厚いことが、如何にも実用を離れた初期の仿製鏡に共通した面を持つているのが、また思い併わされることである。

玻璃の場合遺品が目立たないものである点で、なほ資料

背文の工合が、近年その遺例の増加した北九州に於ける初期の仿製鏡類——いま問題としているとほぼ同時期にその地方で鑄造されたと認められるもの——に酷似している点でこの事が強くも思われるのである。第六図に載せた豊前国京都郡犀川町本庄通称大池出土の一鏡をとつて玻璃鏡背文と較べると、繁粗の別はあることながら、兩者の同似是頗る明瞭である。ところが上述の如くその仿製鏡の鑄造されたと同じ時期に現実と同じ地方で玻璃の玉類が作られて、勾玉の鎔范が出て来たのであつてみれば、いまは出土地の所伝などないが、同文の玻璃の小鏡を以て同地での所産とする可能性が充分に考へられることになる。一体濃緑色の玻璃は姿見など

は限られていることではあるが、これが認められるとなると、勾玉などに加えて、玻璃の釧から鏡までもこの国で作られたことになる。そうすると玻璃が大陸文化の波及で此の国に伝えられた際、その技術がよく受容され、間もなく、その製作が北九州の一部で行われた具体的な事実が確められたことになる。そしてその時期たるや所謂弥生式文化の中期に当つているのである。

弥生式文化期なるものは我が国での石金過渡の低い文化の時代として、いまや固定した概念の下にその編年が追及されつつあるかの現状にある。併しその中期の標式遺跡たる筑前三雲・須玖の甕棺墓にあつては、うちに船載の多くの珍宝——ここに取り挙げた玻璃璧の如きと数多い鏡などがそれである——を副葬した点で、有力者の奥津城であつて、ただ内容に於いて近畿地方の古式古墳に比すべきものがある。ここに問題とした玻璃に見る事象はまさにそれと結びついている。この中期に当つて、それに先立ちこの種の進んだ工芸品の製作が既に行われていた。そうすると弥生式土器を標式とするこの文化は実際に於いては低い金石過渡期のもではなく一つの文化躍進の期であつて、その

中期に於いて、既に工芸の作品にあつても特色のあるものを作り出したことがこの点で確められることである。

この一文に就いては初に書いた鈴木基親氏と共に資料の上で九州大学文学部の渡辺正気君に負うところがあり、また挿入の実測図に關してはすべて金関恕君を煩わした。終りに記して謝意を表する。

（昭和三十四年十月二十五日）

- ① 後藤守一氏「硝子製玻璃璧断片」〔考古学雑誌〕一一ノ二）及び『筑前須玖史前遺跡の研究』（京都大学考古学研究报告第十一冊）。
- ② 浜田・梅原『慶州金冠塚と其遺宝』（朝鮮総督府古跡調査特別報告第三冊）梅原、『慶州金鈴塚飾殿塚発掘調査報告』（大正十三年朝鮮総督府古跡調査報告第一冊）。
- ③ 梅原「中国古代のガラス」〔ミュージアム〕六七号）。
- ④ 梅原「支那漢代の玻璃」〔徳雲〕四ノ一所載、『支那考古学論攷』所収）。
- ⑤ 原田淑人博士「東亜考古学研究」所収の諸論攷。
- ⑥ 梅原「安閑陵出土の玻璃碗に就いて」〔史迹と美術〕二二ノ一）。
- ⑦ 故中山博士「須玖岡本新発見の硝子製勾玉」〔歴史と地理〕三三ノ二）。
- ⑧ 同「勾玉管玉」〔歴史と地理〕九ノ六）。

⑨ 「考古学から見た対馬」(九学会連合調査『対馬の自然と文化』所収) 参照。

⑩ 『佐賀県文化財報告書』第五集所載七田忠志氏記述及び坪井清足・金岡恕阿氏「肥前永田遺跡弥生式甕棺伴出の鏡と刀」『史林』三七ノ二。

⑪ その顕著な遺品は近年に於ける湖南省長沙古墓の出土例である。これは多数の玻璃璧をはじめ劍鏃・劍璋等と玉類等に互り、この戦国後半に属するそれ等は、従来漢代とせられていたものと差異のないものである。

⑫ 鏡山猛教授「環溝住居趾小論」(『史淵』第七八輯) 参照。

⑬ 関野博士等『奈良郡時代の遺蹟』(朝鮮総督府古跡調査特別報告第五冊) 参照。

⑭ 故富岡謙蔵「九州北部に於ける古鏡の年代に就いて」(『考古学雑誌』八ノ九所載、『古鏡の研究』所収)、梅原「須玖岡本発

見の古鏡に就いて」(京都大学考古学研究报告第十一冊所収) 参照。

⑮ 梅原「筑前須玖遺跡出土の夔鳳鏡に就いて」(『古代学』第八巻増刊号)。

⑯ 例えば肥前東松浦郡旧鏡村の一遺跡から狭鋒銅銚二口、細形銅劍一口と伴出した二個の勾玉の如きはそれで、共に硬玉である(同地檜田幸之助氏蔵)。同宇木汲田の甕棺墓群——細形の鋭利な細形銅劍類を伴うた——の勾玉類また孰れも硬玉の目立つたもので古式の形式の外に、異形勾玉をも含んでいる。その第三十八号甕棺から出たものは勾玉三個と碧玉管玉四十三個で一連の佩玉をなした如く認められるものである。

⑰ 梅原「上古初期の仿製鏡」(読史会創立五十年記念『国史論集』所載) 参照。第六図に載せたのは筆者の原図を金岡恕君が浄写したものである。もとの鏡では図文が可なり磨滅してこのようにははつきりとせない。

## Glasses in Ancient Japan

by

Sueji Umehara

The knowledge of glasses was diffused to the Eastern Asia from the West during the Warring-States Period, and then to Japan. Archaeological evidences of the antique glasses in Japan have been reported since 1920. The findings of curved glass beads "*magatama*" 勾玉 are noticeable. They had been made in Japan and were unearthed in the Province of *Chikuzen* 筑前 of *Kyûshû* occasionally together with imported Chinese glass disc "*pi*" 璧. Recently, curved glass beads "*magatama*", cylindrical glass beads "*kudatama*" 管玉, a mould for glass "*magatama*", and a glass piece of "*se-gan*" 塞杆, one of the burial ritual objects in the ancient China, were found in the vicinity of *Sugu* 須玖 in *Chikuzen*. These discoveries indicate the situation of glass industry in ancient Japan. In this article, the author re-examines these previous findings of glasses, points out the imported glass relics and home-made pieces, and discusses their archaeological sites. He also mentions about an uncommon small glass mirror kept by the late *Kôzô Moriya* 守屋孝藏 in Kyoto, and proves that it was made in the Western Japan.

## The Formation of the Bossism in the History of San Francisco

—a case study in regard to the appearance of the  
American modern society—

by

Kôsuke Shimura

Conversion of the American society into the present century should be partly focused upon the problem of the corruption in politics or the conspiracy of politics with business. Here is an example of the Boss *Ruef's* administration in San Francisco, as a case study. The important problem in this period is the counteracting relation among the national monopolistic capital (the Southern Pacific Railway), which controls politics openly, the country middle or small capital which struggles the big business, (the city capitalists), and the workers. On the other hand, the problem of systematically corrupt politics by the